

市社協 「第3回法人発表会」開催	1
此花区 地域の中で孤立するひきこもりの方や その家族の気持ちを理解してもらうために	2
浪速区・西成区	3
ふれあい喫茶の模擬開催・練習会で活動再開支援	4
ヤングケアラーのこと、知っていますか	5
ICT活用の実践ポイント①	6
住之江区社協 地区社協会長会へ	7
施設協 ふだんのくらしを支援する「こころ」 ー施設職員の声ー【後編】	8

大阪の 社会福祉

2022.3
802

The social welfare
in OSAKA



社会福祉 大阪市社会福祉協議会

<http://www.osaka-sishakyo.jp>

市社協

「第3回法人発表会」開催

市社協では、職員の創意工夫を凝らした主体的な取組みを促し、社協活動をよりよいものにしていくため、毎年、職員の提案と、実践し成果をあげている取組みの報告を募集し顕彰しています。

2月18日、令和3年度の職員

提案・実践報告に、応募のあった優れた提案や取組みについて表彰するとともに、その内容を発表する場として「第3回法人発表会」をオンライン開催し、受賞者の代表がそれぞれの取組みについて報告しました。

(2、3面に続く)



「第3回法人発表会」発表者の区社協職員と審査委員

HB

シティバスの前の席に座っていたおばあさんが、ゴソゴソしているの、どうしたのかなと思ったら、敬老乗車証を忘れたようなのだ。忘れ物はこの年になれば当然だが、50円で乗れるのに210円支払うのは何となく癪だ。人によっては家計に響くかもしれない。どうするかと思ってみていたら、正直に「乗車証を忘れました」と断って、50円を支払って降りようとしている。仕組みはわからないが、50円の現金だけが運賃箱に入っていると、運転手さんが売り上げを精算するときに半端な金額が残って、困ることになるかもしれない。と思っていいたら、「今回はいいですよ。次からは乗車証を忘れないでください」と運転手さんの優しい言葉。つまり、このおばあさんの乗車はなかったことにしようというのだ。昔、紙幣が使えないメルボルンの路面電車で、コインがなくて、途方に暮れたことがあった。運転手は笑顔で「今日は俺の誕生日だからいいよ」と黙って通してくれた。どちらの運転手もルール違反しているのだから、こんな善意あふれるのだから、場面はあってもいいのではないかと、強く思った。(石)

職員提案 最優秀賞

令和3年度全国福祉教育推進員研修を受けての大阪市内の福祉教育の今後の展開に向けて



福祉教育プログラムの組み立て



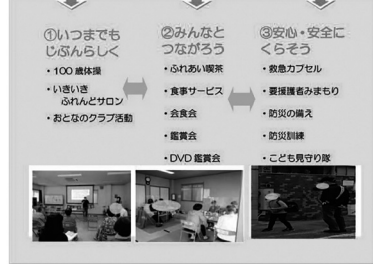
榎本 まなみさん（平野区社協・地域支援担当）

実践報告 最優秀賞

地域住民と福祉専門職の継続的な対話の機会を通じた有機的な地域福祉活動・まちづくりの展開



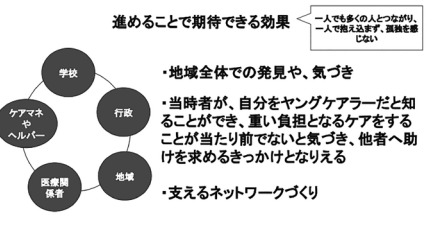
まちづくりの青写真を描くことは、これからのコントコ



松尾 浩樹さん（住吉区社協・包括支援担当）

職員提案 奨励賞

ヤングケアラーが地域の人びととともに生きる地域をどうつくるか



上田 和幸さん（天王寺区社協：地域支援担当）

実践報告 優秀賞

学校×地域×社協「総合的な学習」への協働実践



福祉を身近に感じ、自ら考え行動していく、そんな福祉教育ができれば



由浅 悠さん（西成区社協・地域支援担当）

「第3回法人発表会」開催

職員提案

●最優秀賞を受賞したのは、福島区社協・地域支援担当の大浦瑞来さん、西区社協・地域支援担当の青山紗季さん、港区社協・地域支援担当の森田美香さん、平野区社協・地域支援担当の榎本まなみさん、西成区社協・地域支援担当の由浅悠さんの「令和3年度全国福祉教育推進員研修を受けての大阪市内の福祉教育の今後の展開に向けて」です。5人は研修を受講後に検討を重ね、これまでの福祉教育の経過をふりかえり、これからのプログラム開発、福祉教育実施後のふりかえりに重点を置いた取り組みなど、市内での現状・課題に合わせて提案しました。

●奨励賞を受賞したのは、天王寺区社協・地域支援担当の上田和幸さんの「ヤングケアラーが地域の人びととともに生きる地域をどうつくるか」です。ヤングケアラーが学業との両立ができず将来を諦めたり、自身がヤングケアラーと気づかず孤立につながっていること、また発見が難しく

支援につながりにくいことを知り、社協として「掘り起こし・啓発・心の拠り所」の3つの柱について、今後取り組んでいくことの必要性を提案しました。

実践報告

●最優秀賞は、住吉区社協・包括支援担当の松尾浩樹さん、山下郁美さんの「地域住民と福祉専門職の継続的な対話の機会を通じた有機的な地域福祉活動・まちづくりの展開」が選ばれました。地域活動協議会と地域包括支援センターの共催で「墨江地域福祉会議」を開催し、地域・福祉・行政関係者の情報共有・対話の場を定期的に持ち、「墨江地域大人のクラブ活動」などの取組みに至った経過を報告しました。

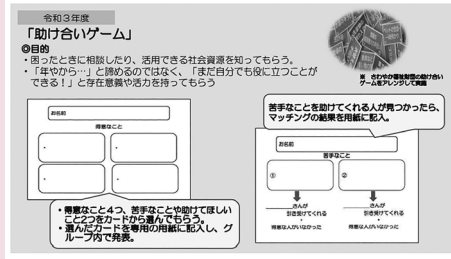
●優秀賞を受賞したのは4つの取組みで、その一つが、西成区社協・地域支援担当の由浅悠さん、修田翔さん、栗川朋佳さんの「学校×地域×社協「総合的な学習」への協働実践」です。令和元年度から南津守小学校とともに

実践報告 優秀賞

「なにわ元氣塾」の場で支え合うことで得られたもの



地域の居場所マップピン
グや助け合いゲームな
どの参加型のプログラ
ムを実施



平野 真由美さん（港区社協・介護予防事業担当）

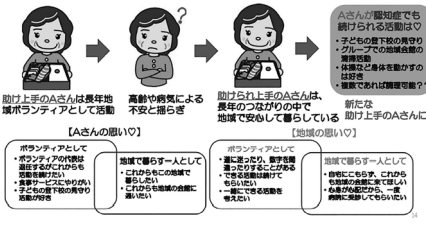
実践報告 優秀賞

地域活動者と福祉専門職が織りなす、地
域情報共有会議を通じた重層的な見守
り・支援の仕組みづくり、その地域づくり



助けられ上手、助け上
手プロジェクトの展開
を

〇〇地域「助けられ上手、助け上手プロジェクト」



前田 宣代さん（東住吉区社協・包括支援担当）

実践報告 優秀賞

住民の助け合い活動から見えた
つながり



専門職ではなく住民同
士だからできることも
ある

助け合いの活動を通して

- ・専門職以外との関わりがほとんどない人
→活動時に人と会い、話ができることが嬉しい
- ・活動の際の関わり
→お互い「元気をもらっている」「自分も頑張らなかなんか」
- ・コロナ禍での活動
→「コロナになって出かける場所がなくなり、この活動が唯一の楽しみ」
- ・新しいつながり
→活動や会員の集いがきっかけとなり、新しい友人やつながりができていく
- ・活動に行った後、しばらく依頼の連絡がなかったら
→「この前活動に行った人元気にされてますか？」と気にかけてくれる

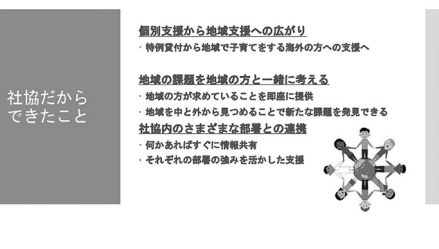
松原 朱里さん（東成区社協・地域支援担当）

第2回最優秀賞受賞者経過報告

多文化共生に向けた
社協としての支援



外国人の方もちよつと
した困りごとを地域に
相談できるようになれ
ば



森田 美香さん（港区社協・地域支援担当）

深めてもらうなど、学校、地域、社協が連携した取り組みの
実践を報告しました。

●2つ目の優秀賞は、港区社協・介護予防事業担当の平野真由美さん、生活支援体制整備事業の久保祐一郎さん、地域支援担当の矢野杏佳さんの「なにわ元氣塾」の場で支え合うことで得られたもの」です。なにわ元氣塾への主体的な参加をうながし高齢者自身が活動的な生活を送るために、区社協内の担当の枠を超えて関わり、広がりのあるプログラムを展開した事例について報告しました。

●3つ目の優秀賞は、東成区社協・地域支援担当の松原朱里さんの「住民の助け合い活動から見えたつながり」です。区内の有償の助け合い活動「きづくちゃん」「たすけ愛」活動の会」をベースに、「住民の助け合いによる生活支援活動事業」「介護予防ボランティア事業」の活動から、新しいつながりや地域とのつながりが生まれていることを報告しました。

●4つ目の優秀賞は、東住吉区・包括支援担当の前田宣代さん、寺岡亜季さん、濱辺隆之さんの「地域活動者と福祉専門職が織りなす、地域情報共有会議」を通じた重層的

な見守り・支援の仕組みづくり、その地域づくり」です。地域活動者と福祉専門職で高齢者の見守り・支援の情報共有の仕組みとして情報共有シートを活用した、地域情報共有会議を開催、それが関係者の信頼関係の構築と気になる高齢者の早期発見・早期介入の仕組みとなり、地域の福祉力の向上につながっていることを報告しました。

第2回最優秀賞経過報告

最後に、第2回最優秀賞受賞者の港区社協・森田美香さんから「多文化共生に向けた社協としての支援」を報告しました。子育て中の外国人同士で集える居場所づくりや多文化共生講座の開催を通じ、関係機関や地域とともに子育て中の外国人を支援する体制づくりを目指していることを報告しました。

審査委員のひとり、大阪市ボランティア・市民活動センターの上野谷加代子所長は、まず「コロナ禍の中で発表をされた皆様の熱意に敬意を表したい」としたうえで、各発表にそれぞれコメントし「いづれも発表水準が高く、ぜひ学会発表にもつなげてほしい」と期待を寄せました。

地域の中で孤立するひきこもりの方々 その家族の気持ちを理解してもらうために

ひきこもりは みんなのテーマ

此花区社協は、昨年7月に見守り相談室と地域包括支援センターが実際に対応した事例をもとにした「ひきこもりのこどもがいる世帯」についての事例検討会を、地域活動者や専門職等で実施しました。それを契機に、2月14日、区民ホールにて講演会「ひきこもる心を理解する」本人や家族に寄り添うための必要なこと」を開催しました。ひきこもりの方を取り巻く環境を知り、地域における支援を考えるきっかけにすることが目的です。



(左から) 鹿島諒さん、宮内大志さん、伊藤寛隆さん、平石純子さん、金田喜弘先生

第1部では、佛敎大学・専門職キャリアサポートセンターの金田喜弘先生が講義をおこないました。その中で、ひきこもりについて先入観や思い込みが本来の生きづらさを見えなくしていると指摘。そして、「ひきこもりは、個人の問題だけでなく、社会の状況（競争社会、無関心、個人主義）が大きく影響しています。そういう意味でも、ひきこもりは誰にでも関係するテーマです」と参加者に呼びかけました。

役に立っている 実感がほしい

第2部では、ひきこもり経験者の伊藤寛隆さんが登壇。伊藤さんの支援者で、不登校やひきこもり経験もあるコネクションズおおさか・宮内大志さんの質問に答える形で体験談を話しました。

伊藤さんは、高校卒業後、介護の仕事に2年半就いているとき、突然つらくなり仕事を辞め、ひきこもるようになりました。現在、アルバイトのダブルワークをこなしていますが、この状況は「以前なら想像すらできない

かった」とのこと。伊藤さんが、ひきこもりから抜け出すのを支えたのは、コネクションズおおさかのスタッフの存在でした。「人と話すのが苦手なので最初は不安でしたが、回を重ね、趣味の話が合って、そこから自分を引っ張り上げてもらいました。家族が気を遣ってくれていたのを知っていて、そこに甘えでもいきましたから、仕事が決まったとき、すぐに家族に伝えました」とふりかえる伊藤さん。再就職後、職場の人はやさしくても「自分が役に立っている実感がなくやめた」こともあったそうです。伊藤さんは、ひきこもりの人たちに「焦らないで、ゆっくりでいいと伝えたい」と話します。

現状維持の 関わりでもいい

第3部では、金田先生、伊藤さん、宮内さんに、不登校の子どもたちが集う「すまいるルーム」で支援する平石純子さん、此花区社協・見守り相談室の鹿島諒さんに加え、3つのテーマをもとにパネルディスカッションをおこないました。

●家族との関係について

平石さんは「ひきこもることも地雷を踏んではいけないと親が気を遣い、それを察したこどもが気を遣う場合が多い」と話し、その原因と関わり方について、宮内さんは「働くのが当たり前」という感覚で言われると、壁を感じてしまいます。気遣ってほしい一面もあるが、もとの関係性を崩さないようにするのがいい」と話しました。

●居場所

平石さんは「開設当初、一人ずつバラバラで話もしなかったのですが、今はうるさいくらい（笑）。こうなるのに半年以上かかりました」。鹿島さんは区社協主催「ひまわりの会」について、「ジェンガ、トランプなど黙々とやっておられますが、ずっと来てくれています。変化があった時に支援できるようつながり続けることが大切」。ちなみに、伊藤さんが参加しやすいのは「2、4人で、ゲームやイベントがあること。いいという安心感がほしい」と教えてくれました。

それを受け金田先生は「ここにいっても攻撃されない、否定されない『心理的な安全性』を大切にしたい、いろんな居場所が増えてくるといい」と話しました。

●地域に求めるサポート

「人づきあいは、苦手なだけでいいではない。顔見知りの

人に声をかけてもらえるのはうれしい」と伊藤さん。宮内さんは「いつもどおりに接してもらうと、本人たちも普段どおりの生活ができて、自分と向き合ったりできるようです」と話します。鹿島さんは「ふれあい喫茶などの活動も、地域の方が普段のように暖かく受け入れてくれることが安心できる居場所のひとつになっていく」とのこと。金田先生は地域活動者に向けて、「一住民としての関わりが大事。虐待や経済的な課題なども、世間話の中でキャッチできるかもしれません。立場を超えてともに事が起こせるといいですね」と締めくくりました。

居場所とは、 場所ではなく心

この講演会を主に担当した鹿島さんは、「最初は、ひきこもりの現状について地域の理解を深めたいという漠然としたものでした。当事者を支援していくなかで『来てもいい自分の場所がある』と思えるだけで、人前を向けることを確信しました。無理に何かをしなくてもいい、ただそこにいられる安心感のある居場所を、これからも地域のひとと創っていききたいと思います」と、今後に向けて気持ちを新たにしました。

ふれあい喫茶の模擬開催・練習会で活動再開支援

本誌令和4年2月号（地域福祉活動の今②）―コロナ禍における地域福祉活動状況調査より―でもとりあげたように、市内のふれあい喫茶の実施状況（令和3年12月末時点）は、「通常通り活動」「一部変更して活動」を合わせて全体の3分の1程度となっています。

ふれあい喫茶は本来、飲食をしながら交流する場であるため、コロナ禍においてこれまでどおり活動することが難しい状況が続いています。

毎月活動していた取組みが長くストップすることで、活動者のモチベーションの低下や、再開のきっかけがつかみづらいことが危惧されています。

そこで、「模擬喫茶」あるいは「練習会」として、まずはボランティアを中心に集まって、再開をイメージするために喫茶の場を実際につくってみる、という試みがおこなわれています。ここで、感染対策の打合せやシミュレーションをしたり、久しぶりにボランティア同士で集まって「またこの活動を再開できるように」と気持ちを一つにする機会としています。

このような模擬喫茶の取組み



利用者役もボランティアが務めました

そこで浪速区社協では、ボランティアがどうしたらそれぞれ無理せず活動できるか、今できることは何かを考え、再開に向けた練習会を開催することとしました。

練習会は、密を避けるためボランティアが一同に開催するのではなく2班に分かれ、利用者役もボランティアがおこない、実際と同じ飲み物やパン、ゆで卵を提供し流れを確認しました。

「2年間も休止してい

浪速区日東地域の喫茶サロン「愛」は、約20年前から大勢の人が参加する地域になじんだ賑やかな活動で、地域の参加者から再開を希望する声が多く寄せられていました。しかし、ボランティアの中には、新型コロナウイルス感染症により活動再開を躊躇したり、休止が続き活動意欲を失いかけているボランティアもおられました。



ひとつひとつの動きをしっかりと確認

たので、なかなかうまくいかない」や「やっぱり早く再開したいなあ」など様々な声を聞くことができました。また、すぐに要領を取り戻し、楽しまれている様子も見られました。区内ではこの取組みが広がり、再開に向けて前に進んでいます。

【西成区】

令和3年の夏頃から、西成区の各地域ではふれあい喫茶の再開に向けて話し合いの場が持たれていました。再開を待ち望んでいる声はあるものの、どうしても安心して喫茶ができるのか：新しく参加するボランティアの経験不足も気になる：委員の



安心してふれあいができる場づくりを目指します

練習会当日、自家製ゼンざいやサンドイッチ、ミックスジュースを準備する姿は、ブランドをまったく感じさせない手際の良さ。感染対策として机やパーティションの配置の工夫、使い捨て食器の活用、会場の導線の検討など、多くのアイデアが出されました。

「ぜんざい上手に炊けてるやん」「こっち向いて座ってもたらええな」と賑やかに、活気にあふれる様子は、まさに地域の底力を感じるとときでした。



地域自慢のメニューは腕によりをかけて

「ヤングケアラー」の現状、知っていますか

近年、「ヤングケアラー」という言葉を目にする機会が増えています。

「ヤングケアラー」とは、一般的に「慢性的な病気や障がい、精神的問題などを抱える家族の世話をしている18歳未満の子どもや若者」、つまり、「本来大人が担うと想定されているような家事や家族の世話などを日常的におこなっている子ども」とされています。

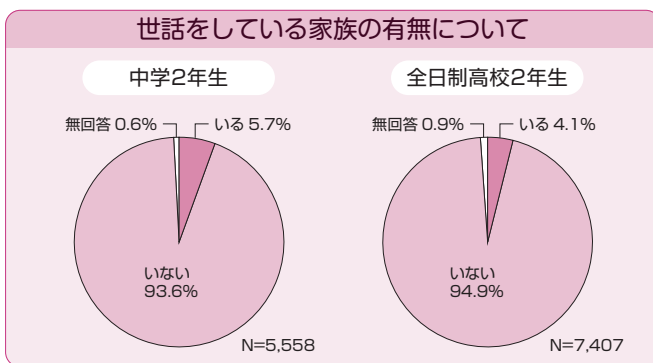
家事や家族の世話などに時間を費やすことにより、友達と遊ぶ時間や宿題をする時間が確保できなかったり、学校に遅刻したり行けなかったりするなど、こどもらしく過ごせていない可能性があり、その責任や負担の重さにより、学業や友人関係などに影響が出てしまうことがあります。

ヤングケアラーがしていること（一例）

- ・料理や洗濯、掃除、買い物など
- ・お金の出し入れ、アルバイトで働く、通訳をするなど
- ・衣服の脱ぎ着の介助、入浴・トイレの介助、移動介助など
- ・その人を見守ったり連れ出したりするなど
- ・きょうだいの世話をするなど

厚生労働省と文部科学省が連携し「ヤングケアラーの実態に関する調査研究」をおこない、令和3年3月にとりまとめた報告によると、世話をしている家族が「いる」と回答したのは、中学2年生が5・7%、全日制高校2年生は4・1%となっています。

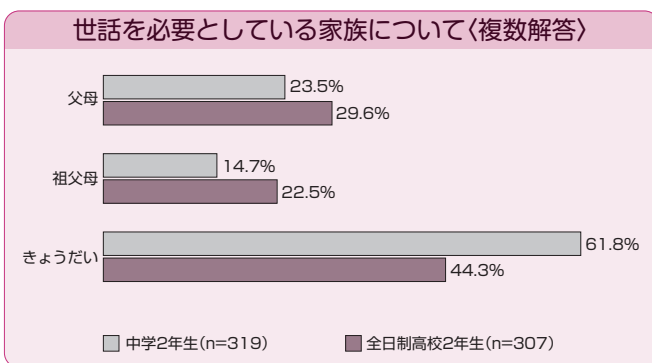
世話をしている家族の有無について



世話をしている家族の内訳は、中学生2年生、全日制高校2年生ともに、きょうだいが最も多く、父母、祖父母と続いています。きょうだいの状況（複数選択）は幼いが7割以上であ

り、身体障がい、知的障がい、精神疾患・依存症（疑いを含む）、精神疾患・依存症以外の病気の順となっています。

世話を必要としている家族について〈複数解答〉

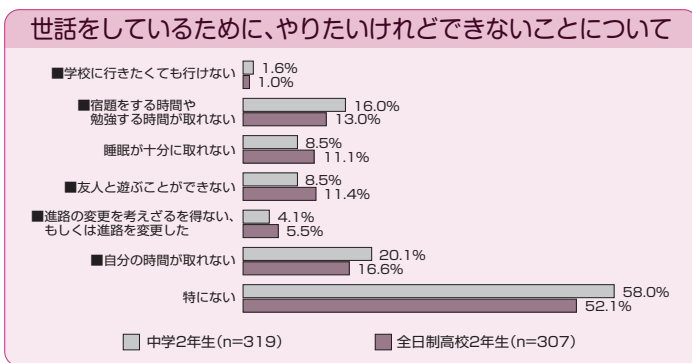


一方で、ヤングケアラーと自覚している中高生は約2%であり、ヤングケアラーの認知度についての質問では、「聞いたことがない」が8割以上を占め、「聞いたことがあり、内容も知っている」「聞いたことはあるが、よく知らない」がどちらも1割未満となっています。また、「世話をしているために、やりたいけれどもできないこと」

については、半数以上が「特にない」と回答しています。

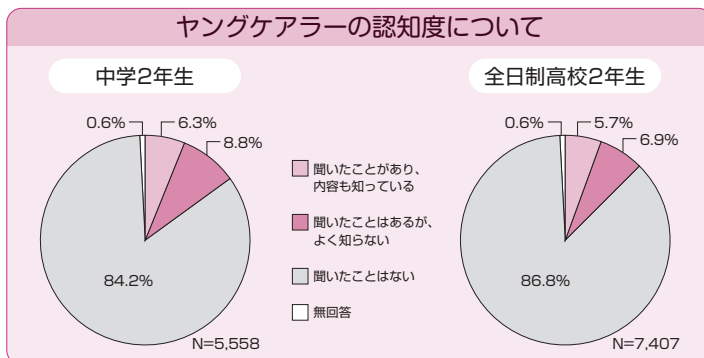
このことから、当事者であるこどもたちが、ケアを担うことで自身の権利が侵害されていることを自覚しておらず、困りごとを感じていてもSOSを出せずにいる可能性があることがうかがえます。

世話をしているために、やりたいけれどもできないことについて



同調査研究では、中学2年生のうち半数以上、全日制高校2年生のうち2割が小学生の時からケアをしていることを示しています。ケアの期間の長期化が危惧される中、ヤングケアラーの概念の認知度が向上すること、こども自身や周囲がヤング

ヤングケアラーの認知度について



ケアラーであることに気づき、適切な支援につながる事が期待されます。また、ヤングケアラーであるこどもたちが気軽に相談しやすい声を上げやすい環境や、発見・相談につながる多様な場をつくる事が課題となっています。

この課題に対して、社協として誰ひとり孤立させない地域づくりを目指していく中で、関係機関と連携しながら、どのような取り組みができるのか考え、実践していきます。

グラフ出典…「ヤングケアラーの実態に関する調査研究」（令和3年3月）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社

ICT活用の実践ポイント①

住之江区社協 地区社協会長会

コロナ禍においてつながりを絶やさないためのひとつの手段として、地域福祉活動のさまざまな場面でのICT活用が急速に広まっています。本誌でも各区の取組みや「ICTでもつながりづくりプロジェクト」レポートを掲載してきました。ここでは、「ICT活用の実践の中でポイントとなる部分に焦点をあて、各区社協や地域での取組みを紹介します。」

住之江区社協では令和2年度から、地域と区社協の連携強化や地域福祉活動におけるICT活用を進めるため、区社協と区内14地域の会館にタブレット端末を導入していますが、2月15日に地区社協会長会としては初めて、Zoomを使ってオンライン開催しました。開催にあたっては、各会館に常駐する見守りあったかネットコーディネーターが、セッティングや機器操作で会長をサポートしました。

手など）を送ったり、チャット機能を使って質問を送るなど、オンライン会議ツールならではの参加の仕方、コミュニケーションを使いこなし、距離を感じさせない会議となりました。参加した会長からは「長い間会っていないが、顔を見られて安心した」との感想がありました。

令和2年11月の地区社協会長会で、これから各地域で使うタブレットをはじめお披露目した際は「こんなややこしいようなものを使えるだろうか」という声もありましたが、これまで区社協や地域では、見守りあったかネットコーディネーター連絡会のオンライン開催や14地域の会館をつないでの研修会開催、地域間の連絡体制の強化など、ICTを活用した取組みを重ねた成果が実ったオンライン地区社協会長会となりました。

ここがポイント！

- 地域の会館のオンライン環境を整備
- 地域内にICTを使える人を増やす
- 資料は事前送付＋画面共有でしっかりと情報共有
- オンライン会議ならではの機能を使ってもらうための声かけ
- ICT活用の機会を繰り返し持つ

今後、このようなICT活用の動きが、地域の活動にも広がっていくことが期待されます。



風をよむ

認知症高齢者の気持ちへの配慮

大阪市立大学大学院 生活科学研究科 教授 岡田 進一

認知症や認知症ケアに関する研究が進み、認知症高齢者の状況が分かるようになってきた。認知症高齢者の中には、短期記憶の障害で、自動販売機に小銭を入れてボタンを押すといった動作ができなくなり、目の前にある自動販売機のジュースを買うことができず、失望感や絶望感が大きくなっていくことがある。

対して攻撃的になったり、エネルギーの消耗で疲れているため、うつになったりして、ますます、認知症による症状が悪化していくことになる。

また、短期記憶の障害から、自分でタンスに入れた財布について忘れてしまい、誰かに財布を盗まれたと確信して、被害的になり被害妄想が始まることもある。

認知症高齢者に「意欲低下」という状態が生じることがある。しかし、認知症高齢者の立場に立つて考えれば、認知症による症状で、さまざまな日常生活の動作を行うのに、多くのエネルギーを費やし、さらに、焦燥感、失望感、絶望感などが生じて疲れやすく、さまざまなことに対するモチベーションが低下して、「意欲低下」の状態になるとは、当然のことであると考えられる。

このように、認知症高齢者にとって、1つ1つの日常生活の動作を行うことに、多くのエネルギーや集中力が必要となり、また、認知症による症状の悪化で、焦燥感、失望感、絶望感などが生じることもある。そして、そのような状況であるにもかかわらず、家族などから、認知症高齢者の状況に対する理解がなされず、認知症高齢者が、家族に

「意欲がない」ように見える状況であっても、認知症高齢者に対して、説得を行ったり、励ましたりせず、認知症高齢者の気持ちを配慮しながら、「何か、お手伝いすることはありませんか」といったような適切なコミュニケーションを行うことが望まれる。

ふだんのくらしをささえるしごと

後編

—施設職員の声—

大阪市内には、高齢者、障がい者、こども、生活困窮者などを対象とした社会福祉施設が約1,000か所あり、そこには一人ひとりの暮らしを支える施設職員がいます。「具体的にはどんな仕事?」「やりがい?」「大変なことは?」——「福祉を学ぶ学生のための施設職員とのWEB懇談会」(令和3年11月)に出席した10人の若手職員に聞いてみました。前号に続き、後編として5人分を紹介します。

※本記事は大阪市社会事業施設協議会HPとの連動企画です。詳細はHPからご覧ください。

URL <https://sisetsukyo.osaka-sishakyo.jp/post-training/fukushigoto-1/>

- ⑥児童福祉施設 報恩寮(天王寺区) 阪上 真一さん【11年目】
- ⑦保育施設 大国保育園(浪速区) 西 理華さん【10年目】
- ⑧高齢者施設 特別養護老人ホームゆめあまみ(東住吉区) 橋本 彩乃さん【5年目】
- ⑨生活保護施設 救護施設 三徳寮(西成区) 上田 悠花さん【3年目】
- ⑩障がい者施設 スカイ・アンドロメダ(平野区) 小池 菜月さん【1年目】



福祉を学ぶ・関心のある学生の方など、PC・スマホからぜひご覧ください



リンク先のページでは、写真とともにそれぞれの仕事のエピソードや思いをQ&A形式で掲載(前編の①～⑤の記事も同ページからご覧いただけます)



今後とも共同募金運動の発展に、一層のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和3年度(第75回)共同募金運動は、コロナ禍のなか、府民の皆様の温かいご理解ご協力ならびに関係団体等の並々ならぬご尽力により、別表のとおりの実績で12月末に終了いたしました。なお、大阪市港区、大阪市住吉区、大阪市平野区、岸和田市、泉大津市、松原市では、3月末までそれぞれの地域でテーマ型募金運動を実施しております。皆様のご支援に厚くお礼申し上げます。

令和3年度共同募金のお礼と報告

地区名	3年度実績額(円)
大阪市計	144,711,430
大阪市を除く各市計	235,824,836
町村計	15,449,901
本部	24,753,328
合計	420,739,495

区分	3年度実績額(円)
戸別募金	294,057,096
法人募金	57,007,448
学校募金	10,641,948
職域募金	6,341,609
街頭募金	10,663,681
バッジ募金	37,840,000
その他	4,187,713
合計	420,739,495
目標額	560,000,000
達成率	75.1%

社会福祉法人 大阪府共同募金会

立ちどまらない保険。 MS&AD 三井住友海上

三井住友海上の安心



クルマの保険 住まいの保険 生活の保険

www.ms-ins.com